

酪農

経営の現場から

過去に経験のない厳しさ

「2年前から酪農経営にとって、さまざまな悪条件が重なりすぎている。経営努力が追いつかない。地域の酪農家で黒字の酪農家はいないのでは」悪条件が重なった上での飼料価格の高騰。土井さんは苦悶の表情で話します。

富士宮地区の酪農は、一般消費者への牛乳供給だけでなく、同地区の観光も担っています。雄大な富士山の麓の放牧風景や酪農体験、乳製品の土産販売などが地域経済を支えています。

土井さん宅でもジェラート店を経営。しかし、「コロナ禍と牧場本体の経営が影響して店舗の営業日数を減らしています。酪農経営

耕畜連携で経営改善に望みをかける

飼料の一つ輸入乾牧草も高騰する中、土井さんが部会長を務める当JA富士宮酪農部会と富士宮営農経済センターは昨年9月から11月にかけて、飼料の自給を図ろうと、地元稲作農家の田で飼料用稲わらの回収作業実証試験を行い、3ヘクタールで6トン进行回収しました。

回収した稲わらを、富士農林事務所での飼料としての適・不適を分析した結果「地域での稲わらサイレージ(飼料)の生産事例の第一歩。代替飼料としての利用も期待できる」と好評価を得ることができました。

の悪化は、広く地域経済にも悪影響をもたらしています。

SPECIAL FEATURE
特集“今”を受け入れ
立ち向かう
酪農・畜産の
現場から

世界的な穀物相場の高騰、家畜飼料輸出国の不作、コロナ禍による輸送混乱、ロシアのウクライナ侵攻、急激な円安…さまざまな要因が重なり、令和2年度から家畜飼料価格が大幅に高騰しています。現在、配合飼料で同年度比約2倍、乾牧草で同約1.8倍と高止まりで推移し、酪農・畜産経営は厳しい状況が続いています。

今回の特集では酪農、畜産現場の声を届けると共に、JAふじ伊豆の支援の取り組みもお伝えします。



JAふじ伊豆富士宮酪農部会 部会長
JA静岡経済連東部地域酪農委員会 委員長

どい かすひこ
土井ファーム社長 土井 一彦さん

富士宮市下条で乳牛100頭を飼育。平成25年からはジェラートや牛乳パンの店「DOIFARM(ドイファーム)」を開店し、当JAファーマーズマーケット「う宮～な」にも出荷している。



専用の機械でロール状に回収した飼料用稲わら



経営危機の中でも日々の生乳生産は続く

畜産

肉牛肥育の現場から

SPECIAL FEATURE

**酪農と畜産（肉牛）経営は一心同体
酪農悪化で畜産も影響**

なんすん地区のブランド牛「あしたか牛」を生産する加藤さん。「酪農と肉牛生産は、密接に結びついている。酪農経営の悪化は、肉牛生産にとっても痛手」と深刻な表情で話します。

肥育農家は、スモール市場（子牛市場）で酪農家が出荷する「交雑種（F1（交代配））」と呼ばれる子牛を購入。約2年間肥育し、肉牛として出荷しています。地域の酪農が衰退すると、遠方まで子牛の仕入れに行かなければならず、生産コストが上昇します。「遠方



JAふじ伊豆あしたか牛推進協議会 前会長
JAふじ伊豆なんすん肉牛委員会 委員長

かとう かつみ
(株)加藤畜産社長 **加藤 克己**さん

ブランド牛「あしたか牛」生産者。長泉町で140頭を飼育。牛の健康状態を常に注視し、安全とおいしさにこだわった生産を続ける。



経営が厳しい中でも品質を落とさないよう肥育

まで行つて、購入できるとも限らない」と加藤さん。
また、肥育農家の衰退は酪農家にも深刻な問題です。乳牛は出産しなければ牛乳を生産できません。子牛を生ませ、約2カ月間育成してスモール市場に出荷します。子牛の販売も酪農家にとって大切な収入源。肥育農家の経営が良くなければ、子牛の市場価格も上がりません。「経営上の結びつきが深い故に、問題は深刻」と加藤さんは頭を痛めます。

飼料の見直しは怖くてできない

肉牛は出荷までに約2年間を要します。肉質の結果は出荷してみるまで分かりません。飼料価格が高騰したからといって安易に飼料の量や質を変更すると、2年後の

肉質に悪影響が出た時に取り返しがつきません。

肉牛には、畜産経営の安定に関する「肉用牛肥育経営安定交付金制度（牛マルキン）」という国のセーフティー制度がありますが、今回は同制度を利用しても厳しい状況です。「今回の状況を分析して、JAには新たなセーフティー制度を構築してほしい」と加藤さんは話しました。



JA職員と経営について意見を交わす加藤さん（奥右）

JAふじ伊豆

の取り組み

SPECIAL FEATURE

当JAでは、行政への支援要請、ヘルパー利用による経営維持（ヘルパー再編）、経営診断に基づく経営改善計画の提案、「みどりの食料システム戦略」の実践（堆肥の有効活用）、乳製品の販売促進など、支援活動を行っています。

農林水産省へ緊急要請

管内の酪農家組合員で構成するJA静岡経済連東部地域酪農委員会（土井一彦委員長）は3月14日、農林水産省・勝俣孝明農林水産副大臣を訪問し、酪農支援を緊急要請しました。土井委員長は「飼料価格や燃料費の高騰、子牛価格の下落などの要因が重なり、経営が逼迫している」と危機的現状を説明。生乳版経営安定交付金制度の早期創設や脱脂粉乳の輸出、配合飼料高騰対策の継続と粗飼料への



勝俣副大臣に要請書を手渡す土井委員長（中央右）

対策導入などを求めました。
勝俣副大臣はこれに応え状況を乗り切れるようにしたい」と話しました。

ヘルパー利用による経営維持

合併のメリットを生かし富士宮、三島・函南、伊豆の国地区のヘルパー組織を再編。地区を越えてヘルパーを利用できるようにしました。酪農家や肥育農家の計画的な休暇取得による働き方改革を支援するほか、家畜の病気発生時の人手不足にも対応します。

経営診断に基づく経営改善計画の提案

酪農家の過去3年分の経営状況を専門家が診断し、個別に経営改善計画の提案を行う事業を令和4年度から実施しています。初年度は1法人9個人の経営診断を行い、改善計画の提案を行いました。

「みどりの食料システム戦略」の実践

有機茶や野菜栽培に、堆肥を有効活用。肥料価格高騰対策と共に、環境負荷低減も目指します。

有機茶栽培では、富士農林事務所、富士山麓堆肥利用促進協議会と連携し、茶生産者の堆肥活用を研究しています。
野菜栽培では、堆肥の成分分析や野菜生産者を審査員とする堆肥の品質向会を開いて、堆肥の品質向

牛乳消費を呼びかけるのぼり旗を作成

牛乳飲んで酪農支援

JAふじ伊豆

牛乳消費呼びかけの継続

直売所などに酪農支援ののぼり旗を設置し、引き続き消費者に対して支援を呼びかけます。



伊豆箱根鉄道「三島駅」で地元産牛乳を配布し消費を呼びかけ動画(YouTube)も作成し牛乳消費をPR(二次元コードから簡単アクセスできます)